



<横山泰賢師の略歴>

- ・1965年：広島県生まれ
- ・1975年：10歳の誕生日に得度、曹洞宗の僧籍に入る
- ・1988年：駒沢大学仏教学部禅学科卒業⇒大本山永平寺上山、安居修行に入る
- ・1991年：大本山永平寺乞暇、安居修行を終える
- ・1993年：北米や欧州にて坐禅を基本とした国際布教に従事、国際センター主事などを歴任
- ・2008年：日本へ帰国
- ・2009年：広島市禅昌寺住職に就任し、一般坐禅会、国際坐禅研修、社員研修会、禅茶房など様々な参禅活動を継続的に行う
- ・2016年：大本山永平寺国際部部長に就任、現在に至る



講演に先立ち「イス坐禅」を5分間行って、心を静めてからスタート

*『WEBや画像よりも五感で体得していただきたい』との事でスライドは3枚のみ



大本山永平寺

<講演(法話)内容>

■ 自己紹介

- ・父親が曹洞宗の寺の住職(普通の寺というより坐禅道場)だったので、若い僧侶が多数いて子供の頃から坐禅や僧侶の生活には慣れ親しんでいた
- ・当時から全ての行動がお檀家さんなどを通じて父に筒抜けでプレッシャーに(=自由な“禅”の精神とかけ離れていた)
⇒ 高校の頃反発⇒ しかし自分が頂いた御縁と向き合わないと、と思い直し18歳で駒沢大学仏教学部へ
⇒ 禅学科で学ぶうちに面白くなって永平寺にて修行
- ・地元に戻ると、お寺の副住職として大切にされた⇒ ある時原爆被爆者のお檀家さんのお宅で法話をしていると「あなたは若いから分からない」と鼻柱を折られる⇒ このままではいかん、と海外へ修行に
- ・去年ミラノ万博で“禅と精進料理の福井県”の催しに永平寺が協力、4日間務めた(5分間のイス坐禅+ゴマ豆腐)
*この期間、日本館の待ち時間=最長10時間! ⇒ 日本人及び日本文化に対する期待の高さに凄い緊張感



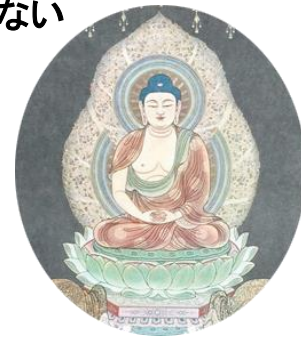
■ 道元禅師の生涯(資料1より)

- ・1200年 内大臣久我通親(みちちか)を父に、摂政関白藤原基房の娘伊子(いし)を母として誕生
- ・3歳で父を、8歳で母を失い、13歳の時に比叡山横川にて出家得度
- ・17歳で京都建仁寺に参じ、栄西禅師とその高弟明全和尚に師事
- ・「人は生まれながらにして仏」だと教えられているのに何故修行が必要なのか、との問題意識
⇒ 23歳で明全和尚と共に宋に渡り天童山景德寺に、そこで曹洞禅の大事を会得
- ・1227年帰国、建仁寺⇒ 1233年京都深草に興聖宝林寺を開く⇒ 1244年越前に大仏寺を開く
⇒ **1246年**大仏寺の寺号を“**永平寺**”と改める
- ・道元禅師の坐禅＝「**只管打坐**(しかんだざ)」: 坐に徹する
 - * 何も考えないつもりでも坐禅中には善と悪などの分別が浮かぶ
⇒ 分別に振り回されない生き方を坐禅から学ぶ
 - * 色々な思いを放っておく、相手にしない⇒ 自然にその思いは消えてなくなる
 - * 「放てば手に満てり」と道元禅師は言われており、手放しにすることで多くを学び得ることができる、しかし人は何かを失うことを恐れて(＝執着・エゴ)手放しにできない⇒ 実際は五感で経験したことは手放しても失われない
- ・「**正身端坐**(しょうしんたんざ)」: 正式な坐禅の姿勢、脳科学的にも良いことが立証されている



■ 道元禅師の著述(資料2より)

- ・「**普勧坐禅儀**(ふかんざぜんぎ)」: 1227年宋から帰国して最初に撰述(普く勧める坐禅の仕方)
 - * “**不思量**”また“**習禅には非ず安楽の法門**(坐禅は習うものではない)”とも
 - * 坐禅にはもう一つの流儀“**公案禅**(臨済宗)”がある
 - * 「**修証一如**(しゅうしょういちによ)」: 修行の後に悟りが開けるのではなく、**修行と悟りは一つ**である
- ・「**辨道話**(べんどうわ)」: 釈尊の説かれた教え(道)を一所懸命勉強する(技術だけ教えたのでは「道」にならない)
 - * 辨は二人の人が言い争う意味で、「辨」はその間に力が入って争いを取りさばき力にする意(＝努める、力をつくす)
- ・「**典座教訓**(てんぞきょうくん)」: 食を司る僧の教本、道元は料理法から食事の作法(＝茶道)まで修行として重視
 - * 「器物は仏様の頭だと思って扱え」、メニューに対して好き嫌いを言わない⇒ 人に対しても同様
 - * 三心「**喜心・老心・大心**」: 老心(見返りを要求しない)⇒ 喜心(そういう生き方を喜びに)⇒ 大心(偏ることのない大きな心)





Q: 西洋の人が日本文化に興味を持つ(昔は日本人が向こうに憧れていた)のは、彼らが行き詰って打開策を求めているから？

A: 英語はラテン語(キリスト教)の影響が大きいので、アメリカでは「禅」を宗教(Religion)ではないという人が多い。

∵ Religionの語源は何かと何か(=神と人)を繋ぐもの、一方「宗」は人や天の根源の意味(一体)⇒物事の本質(源)に気づく生き方が禅

Q: 「皆が寝る時は寝て・・・、とかエゴは捨てなさい」と言うが、この辺が日本人の横並びで際立たない文化を作っているのでは？

A: とても良い質問、なぜ道元は「動静大衆一如」と説いたか⇒∵「自我・エゴは立てようがない(無我)」(大乘仏教・般若経典)

* 人は生まれた時から国籍・両親の選択肢なし、偶然の寄せ集めでしかない(その後の選択で同じ国・時代などで傾向は似るかもしれないが)

* 「戒」とは例えば「不殺生戒」=生き物を殺すなかれと読むが、植物を含め他の命を頂きながら生きていることを自覚することが大切。

Q: 私は“ゆとり第1世代”、今日は謎が解けました。「自我、エゴは立てようがない」とは、私らの時代は食うに困らない⇒自己実現とかに逆に拘束されてきた⇒結果何にも生まれえないという事。ところで「思いを手放す」に関してもう少し説明願います。

A: 「思いの手放し」とは内山興正老師(故人)の言葉。これは人間がいつもやっていること。5分間ずっとはむしろ難しい、手放すのが自然。手放すことが出来ず、行き詰って自殺する人が残念。坐禅が人間の本質に気づかせてくれる⇒意識して手放すのではなく、自然に手放される(=その実践そのものが修証一如)

片平: 自我のところで「辦」の字の語源があったが、争ったり自我を通すのはダメだが、自分の思いを相手に伝え合う

⇒そこから新しい力が生まれる、ということなら良いハズ

Q: 「若いから分からない」と言われたとの事ですが、むしろ経験が邪魔をすることも、だから争いを恐れることなく挑戦することも大事。師はどうしてアメリカに行くとかの挑戦をしようとされたのか？

A: 私が渡米しようと思ったのは、日本の寺院には長い歴史や伝統があるが故に、何が本質か分からなくなってしまうことを懸念したから。例えば永平寺も禅の聖地としてブランドと言っても良いでしょうが、伝統や歴史が長い為に保守的な部分もある。ブランドを護るには保守性と革新性の両面が大切だと考える。(渡米し、理論的な納得がないと*合掌すらしてもらえない、原始仏教的な経験もした)

*合掌=左手は自分、右手は大宇宙、即ち合掌することで自分と大宇宙が一体であることを忘れない、気づきの実践。

片平: 道元禅師は在家ではなく出家して修行してこそ、としているが、それと現在の永平寺の役割とは少し違うのでは？

A: 道元禅師は「出家するのが一番の近道」としたが、大乘仏教の興起は、僧院に籠って一般大衆と乖離した部派仏教への反発として僧俗が一体となって起こした運動による。その運動が一つの流れを形成し、インドから中国へそして日本へと伝わった。故に僧俗が「共に学び共に育つ」ことが大切。

⇒そのような菩薩行の実践が出来得る僧侶を養成すべく、永平寺では日々修行が行われている。

<感想>

始まる前は「永平寺」と「国際部部長」の肩書がミスマッチに感じましたが、Religionの語源を聞いて納得。キリスト教徒にとっても、「坐禅」は人間の本質(生まれながらにして仏)を取り戻す実践だったのですね。